

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-4

長廊下を通して案内された南向きの十畳の居間の左側に北を背にして、繊細な彫りを施した重厚な仏壇があった。

真紀は手ぶらであったけれど、臆することもなく、ごく自然に麻里子に断ってから、仏壇の前に正座をして、ご本尊に一礼後、ローソクに火を灯して線香に火をうつすと合掌した。秋分の日まで一週間足らずで、初彼岸のせいもあってか、真新しい位牌の傍に青紫色のリンドウの花が供えられていた。

不思議と特段の感慨もわいてこないでいる自分自身、もっと深いところでつながっているからだ。真紀は平静さを保っていた。

麻里子は襖で区切られた二十畳の奥座敷に真紀を通すと、着替えのために席を外した。

縁側を挟んで見える中庭に、築山があり、季節の木立があり、汲みあげられた地下水が注ぐ池には錦鯉が泳いでいた。

あれよあれよと言う間の経緯に違和感を覚え始めた真紀の視点に、映画のカットバックさながら、さっき目にしたボンネットを滑る一枚の落ち葉が、今しも風に乗って舞ってきたかのように水面に触れると、一匹の鯉が鮮やかな緋色を見せて跳ねた。

「お待たせしました」

平服に着替えた麻里子は、外の喧騒など事もなげに言いながら、持ってきたトレイをテーブルに置いた。

「お忙しいのに、よろしいのですか？」

「女杜氏然としてのパフォーマンスは苦手なんです。口実ができてホッとしています」

「麻里子さんとうろくしているのが、嘘みたいなことに思えてきて……」

「これもご縁ですから。冷酒を持ってきました。いける口ですよ？」

「あら、昌幸さん……？おしゃべりね」

「ええ、酔うと、嬉しそうに問わず語りに真紀さんの話をしてくれました。でも、私と二人きりで飲んだ時だけです。これはヒントになりませんから」

麻里子は、臆する風もなく言って、冷酒を勧めた。

「これ、まとめ買いします」

真紀はグラスの酒を飲みほしてから、旨酒に例えるニュアンスの言い回しをした。

「銀座のお店に送っておきます」

「代金先払いにしてください」

「まだ商品化していませんので」

麻里子は、いわくありげな笑みを浮かべて、やんわりと断った。

「意地悪ね。もうこうなったら、酔わせちゃうから」

この場は碎けるしかないと思った真紀は、相手のグラスにボトルを傾けて応酬した。

「さすが一流の勧め上手。ではニョロニョロと、いただきましょうか」